

東京国立文化財研究所要覽

(一九五六—一九五七年度)

# 目次

一、浴 革	一頁
二、機 構	七
A 機 構 図	七
B 定員及びび人事	八
C 定員配置及びび現員	八
D 予 算	九
三、研 究 活 動	九
A 個 人 研 究	一〇
1 昭和三十一年度個人研究並びに事務分担	一〇
2 昭和三十三年度個人研究並びに事務分担	一六
3 科学研究費による研究	二一
a 各 個 研 究	二一
b 助 成 研 究	二三
B 共 同 研 究	二三
1 光学的方法による古美術品の研究	二三
2 科学研究費による研究	二五

総合研究	二五
C 研究論文・著書	二七
D 研究報告	三五
E 講演・放送(テレビ)	三八
F 展    視	四〇
四、施    設	四〇
A 光学的研究設備	四〇
B 保存研究設備	四〇
C 蔵書と資料	四一
1 蔵    書	四一
2 資    料	四二
D 黒田記念室	四二
E 閱    覧    室	四二
F 土地と建物	四三
五、刊    行    図    書	四三
A 昭和三十一、三十二年度の刊行図書	四三
B 既刊図書	四四
六、職    員	四五
七、本研究所関係法規並びに規程	四六

## 東京国立文化財研究所要覽

### 一、沿革

本研究所の沿革は、美術研究所の創設に始まる。

美術研究所は、大正十三年七月、故帝國美術院長子爵黒田清輝が薨去に際して遺言があつた美術奨励事業のために出捐した資金で、同子爵遺言執行人が選択決定した事業である。即ち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志に従い同資金で行う事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は、帝國美術院長福原鏞二郎及び東京美術学校校長正木直彦を通じて諸方面の意見を徴し、又わが国美術上の必要に照して左の事業を行うことを裁定した。

- (一) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (二) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (三) 前二項の目的を達するため適当な建物を造営すること。
- (四) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

昭和元年十二月

右の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校校長正木直彦委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎、同岡田三郎助、同和田英作、同藤島武二及び大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和二年二月

美術研究所準備事業を開始した。

同年十月

東京市上野公園内に耐震耐火、半地階二階建、延坪参百六十坪入合の建物一棟を起工した。

同三年九月

右の建物が竣功したので、美術研究所開設のため必要な備品、図書、写真等の研究資料を設備し、又館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品を陳列した。

同四年五月

遺言執行人代表者伯爵樺山愛輔は、建物、設備、研究資料等一切の外に金拾五万円をそえて帝国美術院長に寄附を願ひ出た。

同五年六月二十八日

勅令第一二五号により帝国美術院に附属美術研究所を置かれ、東京美術学校校長正木直彦は同研究所の主事に補せられた。

同年十月十七日

美術研究所開所式を挙行した。

同六年十一月二十五日

正木直彦は、帝国美術院長を仰付けられ、帝国美術院附属美術研究所主事を免ぜられた。

東京美術学校教授矢代幸雄は、美術研究所主事に補せられた。

同七年一月

美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年四月十八日

株式会社朝日新聞社より明治、大正美術史編纂費として本年より向う五ヶ年間毎年五千円、合計二万五千円を帝国美術院に寄附したい申出があつた。

同年五月二十六日

帝国美術院は右の申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同九年十月十八日

毎年十月十八日を開所記念日と定めた。

同十年一月二十八日

耐震耐火、二階建書庫、延坪三十九坪一棟を竣工した。

同年四月

日本美術年鑑の編纂事務を開始した。

同年六月一日

勅令第百四十八号により美術研究所官制が公布された。

東京美術学校長和田英作は、美術研究所長の事務取扱いを命ぜられ、官制による所員、助手、書記が任命された。

美術研究所研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同十一年六月二十二日

和田英作は願により東京美術学校長を免ぜられ、所長事務取扱の職は自然解消し、美術研究所員矢代幸雄が美術研究所長に補せられた。

同十二年六月二十四日

勅令第二八一号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来の帝国美術院附置が文部大臣の直轄に改められ、職員定員中所員、助手各一名を増員した。

同年十一月二十九日

美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同十三年二月十二日

木造建、延坪二九坪六二五写真室一棟が竣工した。

同十七年六月二十九日

美術研究所長矢代幸雄は所長を免ぜられ、田中豊蔵が美術研究所長事務取扱いを命ぜられた。

同十九年八月十日

黒田清輝の作品、並びに写真原板を東京府西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同二十年五月二十八日

美術研究所の図書、諸資料全部を山形県酒田市本町一丁目本間家倉庫三棟に疎開した。

疎開者は、所長事務取扱田中豊蔵以下十七名(現地囑託並びに採用者を含む)

東京勤務には囑託田中喜作以下十名が残留した。

同年七月―八月

酒田市本間倉庫の図書資料爆撃の危険を避けて、酒田市外牧會根村、松沢世喜雄家倉庫、観音寺村、村上家倉庫、大沢村、後藤作之照家倉庫へ夫々分散疎開した。

同年九月

酒田市疎開の職員は逐次東京に帰任した。

同二十一年三月二十九日

酒田市疎開中の図書、諸資料等の東京向け発送を終了した。

同年四月四日

酒田市疎開中の図書、諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同年四月十六日

東京府西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であつた黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

同二十二年五月三日

美術研究所の官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は、東京国立博物館の附屬美術研究所となつた。(所長田中豊蔵)  
同年八月十六日

田中豊蔵は美術研究所長を命ぜられた。

同二十三年五月十一日

所長田中豊蔵逝去に付、福山敏男が美術研究所長代理を命ぜられた。

同二十四年八月三十一日

松本栄一は美術研究所長を命ぜられ、福山敏男は所長代理を免ぜられた。

同 年

本年度より科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同二十五年八月二十九日

文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附屬機関となつた。

同二十六年一月三十一日

美術研究所の組織規程が定められ第一研究部、第二研究部、資料部、庶務室が置かれた。(昭和二十五年八月二十九日から適用)

同二十七年四月一日

東京文化財研究所の組織規程が定められ、美術部、芸能部、保存科学部、庶務室の三部一室が置かれ、美術研究所の組織規程が廃止さ



れた。

文化財保護委員会委員矢代幸雄は、東京文化財研究所長の事務代理を命ぜられ同時に前研究所長松本栄一は美術部長となつた。  
同年七月一日

東京文化財研究所芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室二室を同大学より借用し、研究を開始した。

同二十八年二月十五日

文化財保護委員会委員矢代幸雄は、欧米出張に付所長事務代理を免ぜられ、美術部長田中一松は所長事務代理を命ぜられた。

同年四月二十六日

東京文化財研究所保存科学部の研究室は、従来東京国立博物館地階の一室に置かれたが、同館構内倉庫四十坪を改造の上移転した。

同年五月二十七日

矢代幸雄欧米より帰朝に付、所長事務代理となり田中一松は所長事務代理を免ぜられた。

同年十一月一日

東京文化財研究所長事務代理矢代幸雄は、同所長事務代理を免ぜられ、文化財保護委員会委員専任となり美術部長田中一松が所長を命ぜられた。

同二十九年七月一日

東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となつた。

同三十二年三月二十八日

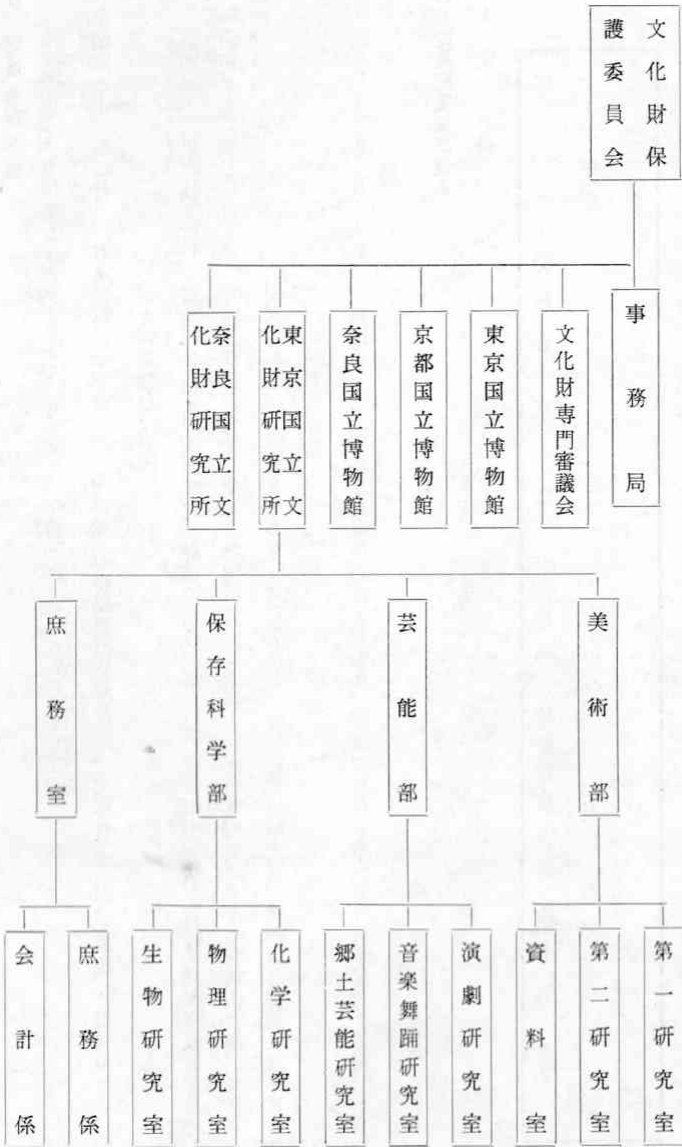
東京国立博物館構内に保存科学部の木骨平家建外部鉄網モルタル塗耐火倉(薬品庫)二坪六六 一棟が竣功した。

同 年十一月三十日

従来の一階建書庫の上に更に一階を増築三階建とし、増築分延坪二一坪四九が竣功した。

二、機構

A 機構圖



**B 定員及び人事**

昭和三十一年、二年度における定員は、増減なく、人事異動の主なるものは次の通りである。

昭和三十一年四月一日 保存科学部長(併任)関野克(事務局建造物課長)は、文部省(東京大学教授)に出向のため、同日付で新たに

保存科学部長に併任された。

昭和三十一年六月十六日 芸能部長(併任)加藤成之が退職のため、同日付で所長田中一松が芸能部長事務取扱を命ぜられた。

昭和三十一年七月十六日 芸能部演劇研究室長兼音楽舞踊研究室長兼郷土芸能研究室長に文部技官浦山政雄が昇任された。

又保存科学部化学研究室長兼生物研究室長に文部技官岩崎友吉、物理研究室長に文部技官登石健三がそれぞれ昇任された。

昭和三十三年一月十六日 所長田中一松が芸能部長事務取扱を解かれ、同時に東京芸術大学音楽学部長下総寛三が芸能部長に併任された。

**C 定員配置及び現員**

1 定員

区分	事務官	技官	事務職員	技術職員	雑務手	計
三十一年度	四	二二	一	七	二	三六
三十二年度	四	二二	一	七	二	三六

2 定員配置及び現員

昭和三十一年、二年度定員および現員には異動がなかった。定員外職員については、若干の異動があつたので、左記に昭和三十三年三月三十一日現在のものをかかげた。

D 予 算

区 分	事務官		技 官		事務雇員		技術雇員		雑務手		計		併任 員勤非 職員常 筆生臨 計時	
	定員	現員	定員	現員	定員	現員	定員	現員	定員	現員	定員	現員		
所 長			一	一							一	一		
美 術 部			一五	一四			七	八			二二	二二	四	
芸 能 部			三	三							三	三	一	
保 存 科 学 部			三	三							三	三	一	
庶 務 室	四	四			一	一			二	二	七	七	三	
計	四	四	二二	二二	一	一	七	八	二	二	三六	三六	六	
														四
														二
														六
														一八
														一

昭和三十一年度	昭和三十二年	人 件 費		事 業 費		計	合 計
		管 理 費	研 究 費	管 理 費	研 究 費		
一四、〇八七、〇二七 <sup>円</sup>	一五、七二八、五二八	九四二、五〇〇 <sup>円</sup>	五、三三二、六九三 <sup>円</sup>	六、一七四、一九三 <sup>円</sup>	二〇、二六一、三二〇 <sup>円</sup>	二二、四四〇、九七七	
一、一四四、〇〇〇	五、五六八、四四九	六、四四二、〇〇〇	六、四四二、〇〇〇	六、四四二、〇〇〇	二二、四四〇、九七七		

三、研究活動

本研究所在、文化財に対する直接の成果を目的としている研究は、共同研究と個人研究とに分れる。

共同研究は、二人以上の研究員の共同して行い総合研究であつて、本研究所に所属する専任の研究員がその遂行の責任を負つてゐる。その課題は、個人では不可能である広汎な総合的研究を必要とするもので、

一、調査手段の総合的構成

二、研究の分担

等を要するものである。

共同研究は、右の性質上本研究所の研究員のみでは遂行が困難な場合があり、東京大学をはじめ、数個の大学の教授が研究員として一部を担当している。

個人研究は、研究員個人の専門とする課題に対しての研究で、研究員個人が責任を負つてゐる。又研究員は原則として個人研究と、本研究所の組織規程に定められた事務を担当すると共に、共同研究に参加する責任をもつてゐる。共同研究と個人研究とは以上の如く研究計画に従つて分れるが、その研究過程と成果とは相互に影響をもち不離一体の関係にある。共同研究の成果は、数年の成果をまとめて刊行する場合が多い。美術部では毎週水曜日に所員の研究報告会を行い、重要な研究の成果を発表して、これについての広い見地から各研究員が検討を加え、「美術研究」をはじめその他の誌上に発表している。

A 個人研究

1 昭和三十一年度個人研究並びに事務分担

△美術部▽

- 大阪四天王寺発掘調査に参加(七、八月)
- 平泉観自在王院発掘調査に参加(一〇月)
- 秩父観音霊場調査に参加(昭三三、三月)

第一研究室

わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究、美術研究の編集。

西域美術史研究

— 旧大谷コレクションの調査に基いて —

熊谷 宣夫

朝鮮古代仏像の研究

雪舟研究

— 歿後四百五十年記念に際する新資料等に拠る —

「美術研究」編集計画及び事務担当

古調点の研究

平安時代仮名書道の研究

○醍醐寺五重塔天井板落書の調査

○平安時代紙背文書仮名消息の調査

— 特に青蓮院資料について —

伊東 卓治

藤原時代の書道と文学

○総合研究「藤原時代の文化の研究」(代表者梅津次郎)において分

担研究

仏画製作及び製作者に関する文献的調査研究

仏教図像学研究

インド美術史研究

○両界曼荼羅の系統に関する調査研究

— 特に東寺本、子島本、高野本について —

○醍醐寺五重塔内壁画両界曼荼羅の調査研究

高田 修

○マトウラー彫刻の研究

○居庸関の図像学的研究

中国絵画史研究

○大阪市立美術館、黒川古文化研究所蔵の中国画調査

○山口謙四郎、橋本節哉所蔵中国画調査

川上 涇

日本書道史の研究

○平安末期、鎌倉初期にわたる書道変遷の研究

○藤原俊成の筆蹟研究

「美術研究」編集事務担当

田村 悦子

日本仏教絵画史の研究

日本仏教図像学研究

○平安時代における両界曼荼羅の調査研究

— 特に東寺本、子島本等について —

○醍醐寺五重塔内壁画の調査研究

○藤田美術館蔵密教両部大経感得図の調査研究

柳沢 孝

第二研究室

わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術の調査研究。  
日本美術年鑑の編集。黒田記念室の事務。

明治大正時代絵画の研究

隈元謙次郎

○洋画運動史の諸資料の調査研究

近代に於ける洋画の動向に就て—藤島武二を中心として—

○総合研究「近代日本美術の基礎的研究」(代表者河北倫明)におい

て分担研究

諸展覧会に於ける現代美術の調査、日本美術年鑑の執筆

現代美術の調査研究

岡 畏三郎

大正期画壇に於ける美術団体の調査研究

○総合研究「近代日本美術の基礎的研究」(代表者河北倫明)におい

て分担研究

現代美術界の調査、日本美術年鑑の編集計画及び事務担当、執筆

明治以降の彫塑の研究

中村伝三郎

明治後期より大正期にわたる彫塑団体の動静

—前期日本美術院彫刻部と三四会、日本彫刻会—

○総合研究「近代日本美術の基礎的研究」(代表者河北倫明)におい

て分担研究

現代彫塑界の調査、日本美術年鑑の編集執筆

現代美術の調査研究並びに資料蒐集整理

関 千代

上村松園及び美術団体烏合会

○総合研究「近代日本美術の基礎的研究」(代表者河北倫明)におい

て分担研究

諸展覧会に於ける現代絵画の調査、日本美術年鑑の編集執筆

現代美術の調査研究並びに資料蒐集

池田涼子

○菊池梨月を中心とする文展の京都作家について

—総合研究「近代日本美術の基礎的研究」(代表者河北倫明)におい

て分担研究—

諸展覧会に於ける現代工芸の調査、日本美術年鑑の編集事務担当、

執筆

明治以降の染織工芸

田実栄子

—総合研究「近代日本美術の基礎的研究」(代表者河北倫明)におい

て分担研究—

○千総の見本裂調査 川島織物の作品、内外博覧会出品作品、受

賞作品の調査 意匠、図案等の調査

近世模様染発達過程における型の意義について

—昭和三十一年度助成研究—

○東京国立博物館、鎌倉長尾美術館等の遺品資料(小袖の類)の調

査

○型紙のコレクター寺尾完吉氏所蔵品による調査

○伊勢型彫刻束枝、友禪染束枝(差友禪、型友友禪)、型染束枝(中

型染、小紋染)等の調査

諸展覧会に於ける現代美術の調査、日本美術年鑑の編集事務補助執筆

西洋美術関係資料蒐集、整理、出納

閲覧者受付事務及び閲覧者研究資料出納の一部分担

資料室

美術資料の作成、収集、整理、保管公表及び閲覧並びに美術研究資料に関する写真の作成及びその原板の保管並びにエックス線写真、赤外線写真、紫外線写真その他の特殊写真による美術の研究。「東洋古美術文献目録」の編集継続。

東洋古陶磁の意匠

○柿右衛門、伊万里に関連あると思われる中国陶磁の模様について調査研究

中川 千 咲

近代日本の窯芸

○総合研究「近代日本美術の基礎的研究」(代表者河北倫明)において分担研究

日本上代絵画史の研究

秋 山 光 和

西域美術と中国美術の交渉

—特に敦煌千仏洞壁画の編年の研究—  
東洋古代絵画の光学的鑑識法

光学的方法による古美術品の研究

○アイソトープによる調査撮影 薬師寺金堂薬師三尊像、東院堂の聖観音像(五月—七月)——龍角寺薬師如来像(昭三二、二月)

久 野 健

○エックス線による調査撮影(広隆寺の宝冠弥勒像、講堂阿弥陀如来像(五月—七月))

日本古代彫刻史の研究

○飛鳥地方の古寺所蔵彫刻の調査撮影(七月)  
○六波羅蜜寺、教王護国寺の調査撮影(十二月)  
○興福寺、法金剛院、延暦寺の調査撮影(昭三二、三月)  
地方に分布する平安時代彫刻の研究

○神奈川県近代美術館出陳の証菩提寺阿弥陀三尊等、千葉、新潟、石川における古彫刻の調査撮影(九月)

○和歌山、滋賀における古彫刻の調査撮影(十一月)  
○小田原、平塚方面、箱根神社等における古彫刻の調査撮影(昭三二、一月—二月)

日本上代絵画史研究

—特に文様について—  
○醍醐寺の装飾文様調査研究

○西域出土世俗画研究

上 野 ア キ

平安、鎌倉時代彫刻の研究

地方に分布する藤原時代彫刻の研究  
○薬師寺、広隆寺仏像の調査撮影(五月)

○神奈川、新潟における古彫刻の調査撮影(九月)

猪 川 和 子



日本絵画史の調査研究

宮 次 男

- 絵巻物の研究―特に絵画史上における様式の種類と整理
- 仏画の研究―特に醍醐寺五重塔壁面の調査研究

東洋古美術文献目録の作成

〇作家、特に画家に関する研究文献の整理

△芸 能 部▽

演劇研究室

- 演劇及びその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務。

近世歌舞伎劇の研究

浦 山 政 雄

- 作者別興行年表作成のため、番附類の資料蒐集
- 曾我物の発生過程を系統的に研究
- 明治、大正期の歌舞伎写真の整理、上演月日の調査

音楽舞踊研究室

- 音楽及び舞踊並びにその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務。

能及び狂言の音楽的ならびに舞踊的研究

横 道 萬 里 雄

〇能の音楽の五線譜による表記法の研究

〇能の音楽の例曲の総譜及び練習譜の作成(観世流)

〇能のリズム型の分析(大鼓・小鼓諸流)

〇狂言謡の分析。特に和泉流・大蔵流の比較とその譜の作成

〇能の諸流における動作単元の比較研究

能楽諸資料の調査

〇観世宗家所蔵文書の調査

〇観世左吉家所蔵文書の調査

〇宝山寺所蔵金春宗家所蔵文書の調査

〇山口市に残る能楽資料の調査

近世邦舞における型の単元の調査

琉球舞踊の基本様式の分析

〇王城盛重より親泊興照に伝承された老人踊及び女踊の調査

山口市に残存する鶯流狂言の調査

郷土芸能研究室

- 郷土芸能及びその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務。

郷土芸能の研究

三 隅 治 雄

―芸能分類論について

- 〇郷土芸能を形態、技術、演目、時期、演者、名称、知識の観客各方面から比較検討し、夫々の立場から分類してゆこうとする研究で、現在文書によつて約六千の芸能資料を各地より収集し、

それに既刊書目の芸能記録を加えて分類基礎台帳を作成、又本年度は特に技術による分類を考究、舞と踊に關して写真資料（舞型記録約四百を収集照会し、「踏む芸」、「跳躍芸」、「巡回芸」、「行道芸」の四分類をたてた。

一念仏芸の研究

○三・信・遠国境地帯所在の盆時の念仏踊、福島白河附近の念仏芸、京都、兵庫、奈良、鹿児島、長崎等所在の芸能について、昨年に連続、実地調査、写真、録音等による資料の収集

〈保存科学部〉

化学研究室

文化財及びその保存に關する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に關する事務。

磨崖仏の保存に關する研究

岩崎友吉

○屋外に露出又は半露出せる磨崖仏の風化崩壊を化学的処理により防止

空気汚染の美術品に及ぼす影響に關する研究

○正倉院を中心とする塵埃、有害ガス等の化学的調査研究  
照明の文化財に対する影響に關する研究

○顔料の剥落、褪色の研究

絵画顔料の剥落防止の研究

○合成樹脂による方法の研究

I・I・Cとの連絡

○研究プログラムの報告

青銅器の成分の分析化学的研究

江本義理

○微量試料よりの分析法及び微量成分の分析法の研究

古代釘の研究

○法隆寺金堂、平等院鳳凰堂に使用されていた時代別の釘の成分及び金属組織学的研究

放射化分析の文化財への応用

○非破壊分析の一つである放射化分析

(Radioactivation Analysis)の古代文化財への応用の可否を

検討

空気汚染の美術品に及ぼす影響

○正倉院周辺道路にもとづく空気汚染の汚染因子の調査研究

物理研究室

文化財及びその保存に關する物理学的調査研究並びにその結果の公表に關する事務。

正倉院に關して空気汚染調査

登石健三

○正倉院周辺の汚染分布を調査 又汚染の著しい銀試片を電子廻析法によつて調査

I・I・Cへ文献抄録報告

○毎年古美術品に関する科学的論文の抄録を作成報告。  
顔料、染料の褪色

○岩絵具の光、ガスによる褪色試験  
○植物性赤系に限り紅について試験  
顔料、金属等の材質の分光分析

Y線による金銅仏の透視研究  
○薬師寺・竜角寺その他

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務。

防微剤、殺虫剤の研究

岩崎友吉  
江本義理

建造物の菌害と古材の顕微鏡的研究

江本義教

2 昭和三十二年個人研究並に事務分担

八美術部

上代日本建築の研究

福山敏男

○大阪四天王寺発掘調査に参加(四月)

○福岡観世音寺発掘調査(五―六月)

○和歌山熊野本宮大社の社殿調査(八月)

○平泉毛越寺発掘調査に参加(八―九月)

○奈良談山神社社殿と文書の調査(科学研究費による―十二月)

○出雲大社拜殿敷地発掘調査(一二月)

第一研究室

西域美術史研究

熊谷宜夫

―旧大谷コレクションの調査に基いて―

朝鮮古代仏像の研究

「美術研究」編集計画及び事務担当

古訓点の研究

伊東卓治

平安時代仮名書道の研究

○平安時代紙背文書仮名消息の調査  
―特に正倉院蔵東南院文書に於ける―

藤原時代の書道と文学

○昭和三十一年度の継続研究

仏画製作及び製作者に関する文献的調査研究

○昭和三十一年度の継続研究

古筆料紙の研究

―是則集研究に関連して―

仏教美術及び図像学の研究

高田修

インド及び東南アジアの美術の研究

○現図曼荼羅の成立と伝承に関する研究

○醍醐寺五重塔壁面の調査研究

○法界寺阿弥陀堂壁面の調査

○石窟寺院に関する研究

○初期ガンダーラ美術に関する研究

中国絵画史の研究

○酒田市本間美術館開催中国画展視調査

○大原総一郎、正木孝之、大阪市立美術館、小川広巳所蔵中国画調査

川上 溼

日本書道史の研究

○平安末期、鎌倉初期にわたる書道変遷の研究

○藤原俊成の筆蹟研究

○西行法師の筆蹟研究

「美術研究」編集事務担当

田村 悦子

日本仏教絵画史の研究

日本仏教図像学研究

○法界寺阿弥陀堂壁面の調査

○醍醐寺五重塔壁面の調査研究

○東寺五大尊の研究

柳 沢 孝

○平安時代の白描図像主として青蓮院、高山寺本の研究

第二研究室

明治大正時代絵画の研究

隈元 謙次郎

○洋画運動史の諸資料の調査研究

近代に於ける洋画の動向に就て—藤島武二を中心として—

○昭和三十一年度の総合研究継続

諸展覧会に於ける現代美術の調査、日本美術年鑑の執筆

現代美術の調査研究

岡 畏三郎

大正期画壇に於ける美術団体の調査研究

○昭和三十一年度の総合研究継続

諸展覧会に於ける現代美術の調査、日本美術年鑑の編集執筆

明治以降の彫塑の研究

中村 伝三郎

大正、昭和期における群小彫塑団体の動静

○昭和三十一年度の総合研究継続

現代美術界の調査、日本美術年鑑の編集計画及び事務担当、執筆

現代美術の調査研究並びに資料蒐集整理

岡 千代

美術作家とその運動史—明治末大正初年に於ける風俗画について—

○昭和三十一年度の総合研究継続

諸展覧会における現代絵画の調査、日本美術年鑑の編集執筆

現代美術の調査研究並びに資料蒐集

池田涼子

菊池梨月を中心とする文展の京都作家について

○昭和三十一年度の総合研究継続

諸展覧会における現代工芸の調査、日本美術年鑑の編集事務担当、執筆

明治以降の染織工芸

田実栄子

—昭和三十一年度の総合研究継続—

○京都工芸繊維大学、京都市立美術大学、千絵、京都国立博物館、大阪日本繊維意匠センター等に蔵する明治大正期の図案関係出版物の調査

近世模様染発達過程における型の意義について

○遺品資料、文献等により小袖模様全般の模様形態の調査

諸展覧会における現代美術の調査、日本美術年鑑の編集事務補助執筆

西洋美術関係資料蒐集、整理、出納

閲覧者受付事務、及び閲覧者研究資料出納の一部分担

資料室

中川千咲

東洋古陶磁の意匠

○中津川の古窯調査

近代日本の窯芸

—特に板谷波山、富本憲吉について—

○昭和三十一年度の総合研究継続

日本上代絵画史の研究

秋山光和

西域美術と中国美術の交渉 特に敦煌千仏洞壁面の編年的研究

東洋古代絵画の光学的鑑識法

光学的方法による古美術品の研究

久野健

○撮影を完了した法隆寺百済観音像、小金銅像、広隆寺宝冠弥勒像等の内部構造の研究

日本古代彫刻史の研究

○撮影を完了した法隆寺、興福寺、神護寺の諸像の研究 京都国立博物館寄託の彫刻の撮影調査

地方に分布する平安時代彫刻の研究

○白水阿弥陀堂、能満寺における調査(四月)

○愛知の東観音寺、長興寺、甚目寺、安楽寺、岐阜の華嚴寺、延算寺等における調査(五月)

○神奈川の長命寺、清水寺における調査(七月)

○長野の長福寺、大法寺、中禅寺、智識寺、清水寺、新潟の本光寺、宿根木の石仏等の調査(九月)

○岩手の成島毘沙門堂、万蔵寺、山形の立石寺等における調査

(十月)

光背、台座の研究

○資料、諸文献の整理。福井、兵庫の薬仙寺、能福寺、無動寺、

多聞寺、円教寺等における調査撮影

東洋上代絵画史研究

上野 アキ

○醍醐寺、法界寺の調査研究

○西域画の顔料の研究

○麦積山関係資料の整理

平安、鎌倉時代彫刻の研究

猪川 和子

地方に分布する藤原時代彫刻の研究

仏像の光背、台座の研究

○白水阿弥堂彫刻の調査撮影(四月)

○愛知、岐阜、福岡各県における主要仏像の調査撮影(五月)

○法界寺における彫刻の調査撮影(十月)

○福井、兵庫における仏像の調査撮影(十一月)

日本絵画史の調査研究

宮 次 男

○絵巻物の研究―特に絵画史上における様式の種類と整理、作家の研究

○仏画の研究―特に法界寺壁画の調査研究

○江戸時代絵画の研究―文人画の調査、特に画家を中心とした調査研究

東洋古美術文献目録の作成

○作家、特に画家に関する研究文献の整理

八 芸 能 部

演劇研究室

近世歌舞伎劇の研究

浦山 政雄

―特に未翻刻歌舞伎脚本の研究―

○現存歌舞伎脚本の総合的調査を目標に、各大学図書館及び個人蔵の脚本の所在目録を作成

○既翻刻、未翻刻の別を調査 未翻刻のものの内容検討、二種を翻刻の準備に着手

音楽舞踊研究室

能及び狂言の音楽的ならびに舞踊的研究

横道 萬里雄

○昭和三十一年度の継続研究

能楽諸資料の調査

○昭和三十一年度の継続研究

近世邦舞における型の単元の調査

○昭和三十一年度の継続研究

琉球舞踊の基本様式の分析

○昭和三十一年度の継続研究

郷土芸能研究室

郷土芸能の研究

三 隅 治 雄

―芸能分類論

- 昭和三十一年度の継続研究  
―念仏芸の研究

- 昭和三十一年度の継続研究

△保存科学部▽

化学研究室

- 磨崖仏の保存に関する研究

- 昭和三十一年度の継続研究

- 空気汚染の美術品に及ぼす影響に関する研究

- 昭和三十一年度の継続研究

- 照明の文化財に対する影響に関する研究

- 昭和三十一年度の継続研究

- 絵画顔料の剥落防止の研究

- 昭和三十一年度の継続研究

- 絵画資材の研究

- 油絵具について諸性質の検討

- 古代ガラスの研究

- 古代ガラスの諸性質の研究

- 発掘品の新強化法に関する研究

- 湿潤状態より直接強化の研究

- 鉄器の保存に関する研究

岩崎友吉

- 防錆強化法の研究

I・I・Cとの連絡・研究プログラムの報告

- 非破壊的分析法による文化財の研究

江本義理

- 放射化分析による文化財の研究

- ―金製品中の銀の検出及び定量―

- エックス線蛍光分光分析法の文化財への応用

―該分析法の文化財への応用の適否を検討し有効手段であることとを確認、醍醐寺五重塔相輪各部の成分推定に利用―

- 古代金銀器の研究

- 青銅器の成分の分析化学的研究

- ―昭和三十一年度の継続研究―

- 古代釘の研究

―明通寺五重塔相輪及び釘、醍醐寺五重塔相輪及び補強材及び釘について引続き研究―

- 和銅及び砂鉄採取法の調査研究

―島根安来市和銅記念館及び鳥上地方の玉銅、鉄滓。砂鉄の採集調査―

- 空気汚染の美術品に及ぼす影響

- 正倉院校倉周辺の汚染度の調査研究

- 欧洲古美術展の梱包

物理研究室

空気汚染の調査

登石健三

I・I・Cへ文献抄録報告  
魔鏡の光学的研究

- 奈良春日神社、奈良国立博物館内外に試片を設置
- 正倉院裏の空気汚染を濃縮採集して質量分析を行う
- シヤリ壺と魔鏡の透視及びその構造調査
- シヤリ壺と魔鏡の透視及びその構造調査
- シヤリ壺と魔鏡の透視及びその構造調査

仏像等のY線による透視

密閉梱包の湿度調節

- ヨーロッパ美術展のためのゲルによる湿度調節法を研究し、実際の梱包に応用、準備室の温湿度調節
- 炭酸ガス等の影響について研究(顔料)
- 紅の外蘇芳を対象とし有害波長と湿度の影響を調査

顔料染料の褪色

材料の分光分析

○昭和三十一年度の継続研究

3 科学研究費による研究

昭和三十一年度	昭和三十二年
<p>a 各個研究</p> <p>能楽の音楽的研究……………横道萬里雄 (能楽の音楽を音楽学的立場から科学的に調査することによつて、能楽の音楽理論を明らかにする。……………交付金七〇、〇〇〇円)</p>	<p>a 各個研究</p> <p>藤山神社とその造営文書の研究……………福山敏男 (この神社は、藤原氏が厚く崇敬した神社であるため、室町―江戸時代の再建になる現社殿も、すこぶる荘麗で、研究価値が十分にある。また、未公刊の文書</p>

○魔鏡の透視及びシュリーレン法による撮影によつて構造、原理を調査

生物研究室

防黴剤、殺虫剤の研究

建造物の菌害とその防除の研究

空中微生物の研究

欧州展梱包殺虫防黴処置

岩崎友吉  
江本義理  
江本義教

岩崎友吉  
江本義理



b 助成研究

昭和期における新日本画の発生  
について……………関 千代

(主な調査は、新制作派協会の作品の傾向、特に柴田安子の作品の調査。その他、団体の新傾向、特に日展、新制作展等の新傾向について……………交付金二〇、〇〇〇円)

近世模倣染発達過程における  
型の意義について……………田 実 栄 子

(主な調査は、近世模倣染遺品資料から、型を用いてあると思われるものを分類、分化発達を考察すること。また、型染技術の調査と併せ、模倣染のスタイルの伝承と発展とを明らかにすること。……………交付金一五、〇〇〇円)

b 助成研究

を多数蔵しており、室町時代以来の詳細な造営文書や図面は極めて価値高く、従つて、それらの調査、整理、研究、公刊を行ふこと。……………交付金一三〇、〇〇〇円)

未翻刻歌舞伎脚本の研究……………浦 山 政 雄  
(歌舞伎劇戯曲の集大成を目的とし、更に、戯曲構造の細部まで追求して、集約的研究を試みることに……………交付金二〇、〇〇〇円)

本年度は該当なし

B 共同研究

1 光学的方法による古美術品の研究

本研究所の光学的方法による古美術品の研究は、一九三〇年頃から美術研究所(現東京国立文化財研究所美術部)の中根勝氏により、X線、赤外線、紫外線、拡大写真などに関する実験的研究が行われた。その結果は、昭和十二年「美術研究」七二号に発表されて、この種東洋美術に対する適用の可能性が認められた。この貴重な実験的研究も、本格的機械設備を有するまでに至らぬうち、戦争によつて中斷

された。

戦後、本研究所では再びこの問題の重要性を取上げ、所員秋山光和を研究担当者とし、所員中川千咲、岡畏三郎、久野健を所内の協力者、東京大学工学部助教中山秀太郎氏、名古屋大学理学部教授理博山崎一雄氏を所外の協力者として研究班を組織した。昭和二十四年度から同二十五年、同二十六年度(この年の担当者は中川千咲)にわたつて科学研究費(個人研究)の交付を受け、また研究所予算にも機械

設備の購入費が認められて、研究着手の運びとなった。

これと前後して所員秋山光和は、昭和二十五年より同二十六年にわたる歐洲留學中、諸国の各研究機関、美術館においてすでに実用化されつつある光学的鑑識設備を見學し、その資料蒐集に努めた。昭和二十七年には、これまでの成果を基礎として一層根本的な研究装置の整備と、それによる基礎的研究を行うため機関研究費の交付を受け、光学

研究に必要な最新の機械の類も格段に整備するに至つた。  
(四、施設—A 光学的研究設備参照)又、昭和二十八年より同三十年度にわたり継続的に総合研究費の交付を受け、また三十一年度からは当所の本予算に研究費がくみこまれたので、研究の領域をも更に拡大し、人員をも増加して研究陣容を整え、次の如く分担した。

作品の鑑識及び美術史的研究	繪	彫	工	書	X	物理化学的鑑識技術の研究	Y 線及び紫外線	化学分析及びβ線後方散乱による判定	赤外線、顕微鏡、カラーフィルム、その他	寫真技術の研究		
	畫	刻	芸	蹟	線							
田中光一	秋山和松	久野健	中川千咲	山辺知行	伊東卓治	中山秀太郎	登石健三	平田稔	山崎雄	山崎文男	小沢健志	橋本弘次
所長	所員	所員	所員	東京国立博物館員	東京大学工学部助教	東京大学工学部助教	科学研究所員	科学研究所員	名古屋大学理学部教授	科学研究所主任研究員	所員	所員

昭和二十四年度より同二十九年度に至る六年間の継続的な光学研究の成果は、本研究所の「美術研究」誌上及び研究報告会等により発表されているが、昭和二十九年文部省

研究成果刊行費補助金の交付を受けたので、本研究所の光学研究班(田中一松、秋山光和、中山秀太郎、伊東卓治、山崎一雄、登石健三、久野健、中川千咲)により昭和三十年三

月二十五日「光学的方法による古美術品の研究」として現在までの研究成果の総合的報告書が刊行された。即ち①この種の研究の意義及び国内国外における研究の沿革と現在、②研究の方法とその設備、③東洋美術品に対する適用の成果の三部に分ち各研究担当者が分担執筆し、豊富な図版（八十二葉）によつて、具体的にその実例を示した。なお、この外この研究に関する発表論文は次の通りである。

「美術研究」所載関係論文目録

第一五九号(昭和二十六年二月)

光学的方法による美術品の鑑識

前言

X線透過法による仏像の研究

X線による彫刻の実験

紫外線による絵画の調査

第一六三号(昭和二十六年十一月)

Xレイによる彫刻の調査

第一六六号(昭和二十七年八月)

東大寺の塑像

第一六八号(昭和二十八年二月)

光学的方法による絵画の研究——ヨーロッパに於ける研究の現状と東洋絵画への適用

日本画顔料のX線透過に関する実験

絵因果経・紫式部日記絵巻・金棺出現図のX線による彫刻の実験

紫外線による古陶磁の実験

秋山光和  
中山秀太郎  
久野健  
山崎一雄  
久野健  
久野健  
久野健  
久野健  
秋山光和  
中山秀太郎  
秋山光和  
中川千咲

ルイヴル研究所に於ける美術品の科学的  
研究

第一七一号(昭和二十八年十二月)

木心乾漆像について

第一七二、一七三号(昭和二十八年十二月、二十九年三月)

叢島神社所蔵小形楡扇絵について

第一七四号(昭和二十九年三月)

源氏物語絵巻についての新知見

源氏物語絵巻の顔料について

第一七九号(昭和三十年一月)

教王護国寺所蔵唐櫃とその絵画

第一八二号(昭和三十年十二月)

鳳凰堂本尊胎内納置の阿弥陀大小呪月輪及び蓮台の構造と彩色文様

鳳凰堂本尊胎内納置の阿弥陀大小呪月輪台座の染書

鳳凰堂本尊胎内物の透過撮影

鳳凰堂本尊胎内納入物中のガラス破片について

研究報告会

ヨーロッパにおける美術品の光学的研究(昭和二十七年二月)

光学的方法による東洋美術品の鑑識に関する研究(昭和二十八年二月)

アイソトープによる金銅仏の透視研究(昭和二十九年三月)

久野健  
秋山光和  
中山秀太郎  
中山秀太郎  
秋山光和  
秋山光和  
秋山光和  
秋山光和  
秋山光和  
伊東卓治  
久野健  
山崎一雄  
秋山光和  
研究者全員  
登石健三  
久野健  
千沢植治

2 科学研究費による研究

① 昭和三十一年度の総合研究

(1) 日本仏画の画像様式技法等の展開に………代表者 田中一松

仏画は、わが国古代及び中世絵画遺品の大部分を占めている。従つて、その史的展開を明らかにすることは、日本絵画史の最も重要な課題であつて、その総合的研究が強く要望されてきた。この研究では、仏画の様式技法のみにとどまらず、宗教的、史料の、材質的、その他、各方面から詳しく調査研究を行う。また、当所において、従来から成果をあげてきた光学的研究の方法を適用して、最も徹底した研究を大成することをめざす。研究分担は、次の通りである。

日本仏画の様式 的系譜	所 長 田中一松	所 員 秋山光和	所 員 上野アキ	所 員 宮次男	所 員 高田修	所 員 柳沢幸	所 員 名大教授 山崎一雄	所 員 川島織物 太田英蔵	東大 助教 桃裕行	所 員 伊東卓治	仏画製作及び製 作者に関する文 献的研究
----------------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------------	---------------	-----------	----------	----------------------------

(2)

唐宋仏画とその  
わが国に及ぼせ  
る影響

東大教授 米沢嘉圃

所 員 川上溼

所 員 久野健

所 員 猪川和子

所 員 小沢健志

所 員 橋本弘次

特殊撮影技術に  
よる調査

（交付金………四六〇、〇〇〇円）

空気汚染の美術品  
に及ぼす影響

………代表者 関野 克

大気汚染によつて美術品は、材質の化学的、物理的  
変化をうけて、色沢、組織強度等を脆弱化させる。  
従つて、虫、微生物の因ともなり又直接害をあたえ  
る。この予防のために、各方面より総合した実態を  
調査究明することは急務である。本年度は、特に国  
家的要望によつて、正倉院附近の道路開通による影  
響調査を主とする。

研究分担は、次の通りである。

空気汚染の美術 品に及ぼす化学 的影響	所 員 岩崎友吉	所 員 江本義理	所 員 登石健三	所 員 江本義教	空気汚染の美術 品の物理的測定	空気汚染の美術 品に及ぼす生物学 的影響
---------------------------	----------	----------	----------	----------	--------------------	----------------------------

空気汚染と美術品の色調変化の資料に関する調査研究

沼津高 前田千寸  
校講師

(交付金……………五〇〇、〇〇〇円)

② 昭和三十一年度の総合研究

(1) 日本仏画の図像様式技法等の展開に関する総合的研究

田中一松  
代表者

昭和三十一年度に引き続き実施した。研究分担者に左の通り幾分の異動があつた。

日本仏画の様式的系譜

田中一松  
秋山光和  
上野アキ  
宮次男  
高田修

仏教図像の展開

柳沢孝

日本仏画の材質に関する研究

山崎一雄  
太田英蔵

仏画製作および製作者に関する文献的研究

東大助教授 桃裕行  
所員 伊東卓治  
所員 田村悦子

唐宋、高麗仏画とそのわが国に及ぼせる影響

東大教授 川上嘉圃  
所員 熊谷宜夫

服制荘嚴具から見た仏像と仏画との関係  
特殊撮影技術による調査

久野健  
猪川和子  
小沢健志  
橋本弘次

(交付金……………五五〇、〇〇〇円)

(2) 空気汚染の美術品に及ぼす影響

関野克  
代表者

昭和三十一年度に引き続き実施した。研究分担者に異動はなかつたが、三十一年度の「空気汚染と美術品の色調変化の資料に関する調査研究」を除いた。

(交付金……………五〇〇、〇〇〇円)

(3) 能楽史料の総合的調査研究

横道万理雄  
代表者

能楽研究は、近年著るしい発展をとげたが、その反面、未開拓の分野も多い。その主な理由は、①資料が、能楽諸流や古社寺に秘蔵され、研究者に公開されなかつたこと。②所蔵者側に学術的研究を進める組織がなかつたこと。③能楽師の専門的知識を借りねば、普通の研究には理解できなかったこと等である。こんど、親世宗家はじめ、能楽の家の人々が積極的に協力されることになった。当所においては、能楽師と研究者の協力によつて五百年來未公開の秘伝書類の調査、整理、公表を行う。研究分担は、次の通りである。

観世宗家所蔵文書の調査研究

a.	書誌学的方面	法大能楽研究所員	表章
b.	語学的方面	国語研究所長	西尾実
c.	芸道論的方面	同部長 東京学芸大助教授	岩淵悦太郎 安良岡康作
d.	技術論的方面	所員	横道万里雄 観世元正 観世寿夫 観世静夫
	観世左吉家所蔵文書の調査研究	所員	横道万里雄 観世寿夫
	奈良県下、岐阜県下社寺所蔵面装束及び文書の調査研究	法大能楽研究所員 東京学芸大助教授	表章 横道万里雄 安良岡康作

(交付金……………三五〇、〇〇〇円)

C 研究論文、著書

雪舟の鎮田滝真景図

田中一松  
ミュージアム六三一・五

雪舟略年表

- 雪舟画について(座談会)
- 拙宗等揚について
- 小野道風の画像について
- 徳力善雪筆雪舟等楊像
- 東屋の一段
- 雪窓筆光風転蕙、懸崖双清図
- 积迦金棺出現図(著書)
- 池大雅筆蘭亭曲水図屏風
- 墨の芸術―中国と日本の絵画―
- 得殿贊李白観瀑図について―室町時代観瀑図の系譜―
- 藤波絵草紙
- 法隆寺壁面(著書)

美術部

飛鳥・奈良時代の様式	日本寺院建築一	平安前期・後期の様式	日本寺院建築二	鎌倉時代以後の様式
萌春 三一・三二・三五	三彩 七五・三一・一五	美術研究一九〇 三三二	美術史 二三 三三二	三彩 八三 三三二
国華 七七八 三三二	美術出版社 三三二	国華 七八〇 三三二	現代の眼 二九 三三二	国華 七八六 三三二
美術史 二八 三三三	平凡社 三三三	国華 七八六 三三二	美術史 二八 三三三	平凡社 三三三

福山敏男

—日本の寺院建築三—

寢殿造邸宅に関する造営文書

中尊寺藏保安三年棟札

信貴山縁起の一場面

大極殿の研究(著書)

日本建築史(建築学大系四—分担執筆)

美術研究一八四	三二・三
ミュージアム六	三一・四
一	
仏教芸術二八	三一・六
平安神宮発行	三二・一
彰 国 社	三二・一

第一研究室

大谷コレクションの西域出土埴像二種

雪舟彩色圖論

雪舟(著書)

楊子江図巻と唐土勝景図橋

雪舟研究の展覧

雪舟(著書)

西域出土の双面壺と人面のアブリケ

錦城山石仏試論

柏木絵第一段の表現

戊子入明と雪舟(上)

美術史一九	三一・一
美術研究一八五	三一・三
角川写真文庫	三一・四
三 彩 七 五	三一・五
ミュージアム	三一・五
日本の名画(平凡社)	三一・一〇
美術研究一八六	三一・一二
美術史二二	三一・一二
三 彩 八 三	三一・一
美術史二三	三一・一

熊谷宣夫

西湖図と天橋立

西域(著書)

クチャヤ将来の彩画舍利容器

戊子入明と雪舟(下)

西域出土のテラ・コッタ共命鳥像

宋元明清の美術

西域の美術

室町時代絵画

二八

大和文華二二 三三・二 |

中国の名画(平凡社) 三三・二 |

美術研究一九一 三三・三 |

美術史二二五 三三・七 |

美術研究一九四 三三・九 |

世界史大系八東亞二 三三・九 |

美術手帖、東洋美術史 三三・一〇 |

図説日本文化史大系七 三三・一一 |

伊東卓治

明治の書道

青蓮院藏表制集及び灌頂阿闍梨宣旨官牌の紙背文書について

安土桃山時代の書

明治時代の書

明治の書道(美術編)

醍醐寺五重塔天井板の落書

江戸後期の書

明治文化史美術編 三一・三 |

図説日本文化史大系八 三一・五 |

図説日本文化史大系十一 三一・九 |

明治文化史八 三一・一一 |

美術史二四 三一・三 |

図説日本文化史大系十 三一・五 |

室町時代の書

静嘉堂本是則集上  
静嘉堂本是則集下

図説日本文化史  
大系七

美術研究一九三

美術研究一九五

三二・一

三二・一

三三・三

高田修

読書春秋 三一・一

美術研究一八三 三一・二

文化一七二 三一・三

美術研究一八四 三一・三

在家仏教四四 三一・四

在家仏教四五 三一・五

Asia Scene 三二・五

ミュージアム 三二・一〇

美術研究一八九 三一・一

村田治郎編「居庸関」 三二・三

美術手帖一三二 三二・一〇

美術研究一九六 三三・一

柳沢孝共著美術研究一九六 三三・一

顧愷之の魏晉勝流圖贊について  
宋元画概観  
中国の絵画

川上涇

美術研究一八八 三二・三

歴史教育五の八 三二・八

美術手帖一三二 三二・一〇

田村悦子

寢殿造邸宅に関する造営文書―附載  
材木注文行間書釈文

石山寺藏虚空藏菩薩念誦次第紙背文  
書について

藤原俊成書状消息の研究

藤田美術館の密教兩部大經感得図に  
就いて

鎌倉時代の仏画

録倉時代の仏画

醒醐寺五重塔壁面の図像学的研究

岡寺本尊光背の板絵飛天について

第二研究室

安井會太郎追悼

美術研究一八四 三一・三

定本書道全集一 三一・六

日本名筆全集一 三一・六

書芸文化院版 三一・三

美術研究一九七 三二・三

柳沢孝 三二・七

ミュージアム 三二・一

高田修共著美術研究一九六 三三・一

秋山光和共著美術史二七 三三・一

限元謙次郎

三二・一

二九



黒田清輝名画集 文部省天然色幻灯画第二〇集 三一・三

狩野芳崖晩期の作品 美術研究一八四 三一・三

忘れられた明治の洋画家―五姓田義松の人と作品― ミュージアム 三一・八

明治時代の絵画、彫刻 図説日本文化史 大系十一 三一・九

春草筆黒き菊図 国華七七五 三一・一〇

明治・大正・昭和「見る美術史」 アトリエ別冊二 三一・一〇

日本に於ける近代美術館設立運動史 現代の目二五 三一・一二

横山大観の人と芸術 萌春四〇 三一・一

明治中期の洋画(一)―明治美術会を中心として― 美術研究一八八 三一・三

近藤浩一路の作品 萌春四二 三一・三

明治中期の洋画(二)―白馬会を中心として― 美術研究一九二 三一・八

高橋由一筆三宅康直像 国華七八六 三一・九

橋本雅邦の人と作品 萌春四七 三一・九

雅邦について ミュージアム 三一・九

橋本雅邦 雅邦名作展図録 三一・一二

フユウザン会 岡 畏三郎

大正・昭和期の洋画史 美術研究一八五 三一・三

日本文化史大系 十二 三一・九

広重 平凡社 三一・六

中村伝三郎 博物館ニュース 三一・一

雅拙と古拙と 美術研究一八四 三一・三

明治時代の彫塑団体、青年彫塑会について 明治文化史美術編 三一・三

明治の彫塑 小川芋銭管見―生涯と作品― 萌春三六 三一・九

ゼンナー銅像について 博物館ニュース 三一・一〇

日本彫刻会小史―岡倉天心と日本近代彫刻― 美術研究一九〇 三一・一

明治期の彫塑 国立近代美術館ニュース三六、三七 三一・一一

関千代

三谷十糸子 現代日本美術全集九 三一・四

柴田安子 現代日本美術全集十 三一・七

堀文子 同右 三一・七

Flowering of the Art of Western Japan 同右 三一・一

上村松園とその作品 美術研究一九五 三一・三

今村紫紅 萌春 三一・三

菊池梨月—その作品と生涯—

池田 涼子 萌春 三七三一・一〇

鳴海有松地方の絞染

田実 栄子 ミュージアム 三一・四

明治の型友禪—千総の見本裂調査を主として—

ミュージアム 三一・一二

明治の写友禪—千総の見本裂調査を主として—

ミュージアム 三二・二

型友禪の模様

デザイン・ジャ 三二・一二  
ーナル五二

資料室

中川 千咲

明治の工芸(陶磁、染織、木竹牙彫など)

明治文化史美術 三一・三

織部焼の意匠

美術研究一八五 三一・三

清朝陶磁の模様

世界陶磁全集清 三一・八  
朝篇

朝鮮の陶磁(一)

博物館ニュース 三一・一〇

朝鮮の陶磁(二)

博物館ニュース 三一・一一

鎌倉時代の工芸

図説日本文化史 三二・一  
大系鎌倉編

明治期の窯業と宮川香山

美術研究一八九 三二・三  
博物館ニュース 三二・三

高麗螺鈿の模様

博物館ニュース 三二・三

江戸時代の工芸

図説日本文化史 三二・五  
大系江戸下

秋山 光和

「日本芸術史資料」のつくられた時期

鷗外全集月報五 三一・二

信貴山縁起絵巻の様式的系譜

仏教芸術二八 三一・六

敦煌本降魔変(半度又変)画巻について

美術研究一八七 三一・七

繁式部日記絵巻

国華七七四 三一・九

敦煌千仏洞—壁画とその歴史

三彩 七九 三一・九

敦煌の再発見

芸術新潮七の九 三一・九

源氏物語絵巻をめぐる

国語と国文学 三一・一〇  
三三の十

源氏物語絵巻の構成と技法

三 彩 三二・一

ベリオ将来のスパシ出土木製舍利容

美術研究一九一 三二・三

器三種

芸術新潮八の五 三二・五

鳳凰堂の落慶

東大出版会 三二・六

信貴山縁起絵巻(藤田経世氏)

図説日本文化史 三二・七

平安時代絵画(下)

大系 三二・七

平安時代絵画(上)

三三・一

ギメー美術館の寄贈品

芸術新潮八の九 三二・九

日記絵について

岩波「文学大系」 三二・一二  
月報八

醍醐寺五重塔壁面の様式と技法について

美術研究一九六 三三・一

久野 健

関東の石仏

仏教芸術三〇 三一・二

黒石寺薬師如来像

美術研究一八三 三一・二

関東古代彫刻史試論

日本史の研究一 三一・三

人里の五社神社

二 三彩 七六 三一・六

日本美術史講座(飛鳥・奈良時代)

日本史の研究一 三一・七

コバルトによる古仏像の透過撮影

四 化学の領域一〇

妙楽寺

三彩 七八 三一・八

王福寺

三彩 七九 三一・九

白鳳文化

日本歴史講座一 三一・九

常楽院

三彩 八〇 三一・一〇

影向寺

三彩 八一 三一・一一

日本美術史講座二—平安時代

五 日本史の研究一 三一・一一

奈良時代の彫刻

図説日本文化史 三一・一一

龍角寺

大系三 三一・一二

日本美術史講座三—鎌倉、室町時代

六 日本史の研究一 三一・一

関東の石仏

六 仏教芸術三〇 三一・一

三三二

天台寺

三彩 八四 三三・二

雙林寺

三彩 八五 三三・三

白鳳時代の彫刻

図説日本文化史 三三・三

黒石寺

大系二 三三・三

日本美術史講座—四桃山江戸時代

三彩 八六 三三・四

東楽寺

七 日本史の研究一 三三・五

出雲万福寺の仏像

三彩 八八 三三・六

白水阿彌陀堂

三彩 八九 三三・七

山梨県大善寺、善光寺

三彩 九〇 三三・七

常教寺聖観音像

三彩 九一 三三・八

山梨県放光寺、観盛院

美術研究一九二 三三・八

東洋美術史—飛鳥、天平、平安—

三彩 九一 三三・九

大仏以後

美術手帖一三二 三三・一〇

万巻上人像について

美術史二六 三三・一〇

日本史の研究二

〇 日本史の研究二 三三・二

明治美術年表

上野 アキ 三三・三

西域出土胡服美人図

編 明治文化史美術 三三・三

美術研究一八九

三三・三

小沢 健志

現代の写真—メカニズムを中心にし  
て—

写真と初夏

美術鑑識写真

金剛寺木彫馬頭観音坐像  
観世音寺馬頭観音像造顕考  
観心寺如意輪観音像

信貴山縁起絵巻研究文献目録  
雪舟研究文献略目録  
世界美術年表  
桃山時代屏障画作家略伝  
光悦研究文献目録  
藤波絵草紙

机(雑誌) 三二・四

ダイヨット(雑誌) 三二・五

アサヒカメラ講 三二・六  
座(四)

猪川和子

美術史二一 三一・九

美術研究一九〇 三一・七

三 彩 三二・二

宮次男

仏教芸術二七 三一・三

萌春三一 三一・五

世界美術大辞典 三一・一一

四 萌春四五 三二・六

萌春五一 三三・一

美術史二八 三三・三

△芸能部▽

演劇研究室

黙阿弥を中心に

近松の芸術観

心中万年草

伊原敏郎著「歌舞伎年表」第一巻の書評

江戸文学地理、浅草(南部)

愛と死の道行—世話物の展望

番附の移動と池田文庫

音楽舞踊研究室

能の現代化に関する諸問題—特に言葉について—

狂言と能・その演技術の二、三の問題

関寺小町の演出

能と狂言について(共著)

幸流小鼓正譜(著書)

能

夢幻能について

浦山政雄

日本文学史(近世) 三二・七

近松門左衛門 三一・八

解釈と鑑賞 三二・一

文学 三二・一

解釈と鑑賞 三二・四

日本古典鑑賞講 三二・九

座「近松」 三二・九

日本古典鑑賞講 三三・二

横道萬里雄

言語生活 三一・五

文学 三一・七

関寺小町記録 三一・七

日本美の発見 三一・一〇

能楽書林 三一・一一

演劇 三二・四

文学 三二・九

謡曲狂言集(共著)

重要無形文化財の指定と能楽

日本の芸術

日本文学必携

郷土芸能研究室

河出書房 三三三・一

能楽思潮 三三三・三

東洋経済 三三三・

岩波書店 三三三・

三隅治雄

伊那 三三三・二

国学院雑誌 三三三・九

芸能復興 三三三・一〇

芸能復興 三三三・一一

芸能復興 三三三・一五

芸能復興 三三三・一一

郷土史研究講座 三三三・一二

保存科学部

化学研究室

岩崎友吉

文化財の虫害対策―メチルプロマイドによる燻蒸を中心―

ミュージアム 三三三・二

三四

正倉院空気汚染の美術品に及ぼす影響の有無に関する調査研究報告

古文化財の分析

防虫済P・C・Pについて

空気汚染の美術品に及ぼす影響

絵画資料の科学的研究

イタリヤに於ける文化財殺虫・殺菌に関する文献紹介

放射化分析の古文化財への応用

正倉院空気汚染の美術品に及ぼす影響の有無に関する調査研究報告

空気汚染の美術品に及ぼす影響

古文化財の金属組織(分担執筆)

物理研究室

ミュージアム 三三三・九

分析化学 三三三・一一

博物館研究 三三三・一二

正倉院の研究報告 三三三・一三

日本美術家連盟 三三三・二

古文化資料自然科学研究会 三三三・二

江本義理

古文化財の科学 三三三・三

正倉院の調査研究報告 三三三・九

正倉院の調査研究報告 三三三・三

科学読売 三三三・五

登石健三

欧州における博物館附属研究所(二)

密閉梱包の湿度調節

欧州における博物館附属研究所(一)

古文化財の科学 三三三・二

古文化財の科学 三三三・二

古文化財の科学 三三三・三

正倉院空気汚染の美術品に及ぼす影響の有無に関する調査研究報告

正倉院の調査研究報告 三一・九

美術品の螢光灯照明

現代の目二三 三一・一〇

欧州における博物館附属研究所

古文化財之科学 三二・三

空気汚染の美術品に及ぼす影響

正倉院の調査研究報告 三二・三

日本魔鏡の一例

古文化財之科学 三三・三

密閉梱包の湿度調節

見城敏子

古文化財之科学 三一・二

### D 研究報告

宋朝芸術の舶載

田中一松 (三一・二、九)

鎌倉美術と明恵・解脱・重源

(三一・二、二二)

明恵上人と高山寺芸術

(三一・三、七)

小野道風像について

(三一・一、二三)

池大雅展に因んで

(三一・三、八)

中山高陽について

(三一・六、二九)

復古主義の仏画

(三一・六、二六)

— 不空羼索観音を中心として —  
— 小林氏葺李白観瀑図を中心として —

(三一・九、二五)

平等院鳳凰堂中央正面の旧扉

福山敏男 (三一・二、二三)

鳥取県岡山の「石堂」

(三一・六、一三)

飛鳥寺の発掘

(三一・六、二七)

本年度の四天王寺発掘・愛知用水地域竊跡発見の土塔

(三一・二、一一)

観世音寺の発掘について

(三一・七、一〇)

雪舟の前半生について

熊谷宣夫 (三一・五、一六)

雪舟の入門について

(三一・六、六)

雪舟画年代考

(三一・一〇、一〇)

雪舟画年代考(於同志社大学)

(三一・一一、一一)

京都の雪舟展

(三一・一一、一一)

宿水寺発見の小金銅仏

(三一・一、一六)

クチャ将来の舍利容器

(三一・一、二〇)

伊東卓治

醍醐寺五重塔落書と青蓮院の紙背文書について

(三一・六、二〇)

是則集その他

(三一・四、一〇)

再び是則集について

(三一・六、二二)

高田修

アジアンター壁画と仏教説話の描写形式  
居庸関の図像 (三一、二、一五)

宮中真言院と東寺の「真言院曼荼羅」 (三一、一〇、一七)

醍醐寺五重塔壁面の図像(美術史学会第一〇回総会) (三一、一〇、一)

The Kaniska Casket and its Bearing on the Gandhara Art. (UNESCO Symposium) (三三、一〇、)

川上 涇

顧愷之の魏晉勝流画賛について(於京都楽友会館) (三一、一一、一)

李日華山水画巻 (三一、四、三)

柳 沢 孝

一字金輪曼荼羅について

(三一、四、二五)

密教画部大経感得図 (三一、一〇、三一)

安井曾太郎の作品について

隈元 謙次郎 (三一、四、一一)

岡 畏三郎

フェウザン会

小出橋重遺作展について

(三一、三、一四)  
(三一、四、一七)

日本彫刻会(明治)

菊池梨月の作品について

池田 涼子 (三一、一〇、二四)

絞り染について

田 実 栄 子 (三一、六、二七)

明治時代の友禅模様(お茶水女子大、服飾美学研究室研究会)

(三一、二、一五)

明代の陶磁

中川 千 咲 (三一、四、二五)

明治期窯業と宮川香山

(三一、一、二七)

鎌倉期の窯業

(三一、一、二七)

近着資料による敦煌石窟の年代(一)

秋 山 光 和 (三一、四、四)

同(二)

(三一、五、三三)

同(三)

(三一、六、一三)

旧法隆寺絵殿障子聖徳太子絵伝の調査

(三一、一〇、三)

源氏物語絵巻(カラスライド映写による)

(三一、一二、二〇)

薬師寺金堂諸尊の調査

鮑彫について(於東大)

日本古代の仏像仏画にあらわれた光背について

上代彫刻について(於千葉大学)

美術作品の写真判定に関する一考察(日本大学芸術学会)

特殊写真の撮影(N・H・Kテレビ)

蓮華王院廿八部衆像について

観世音寺講堂の諸像

一遍聖絵と円伊

脇狂言(東洋音楽学会)

久野 健

(三二、二、一)

(三二、二、一五)

(三三、五、一五)

(三三、五、三二)

小沢 健志

(三一、二、二二)

(三三、二、四)

猪川 和子

(三二、一、三〇)

(三三、七、一〇)

宮 次 男

(三三、三、六)

浦山 政雄

(三一、六、二三)

横道 萬里雄

能の舞踊について(一)(於山葉ホール・日本舞踊協会) (三二、三、三二)

黒川能の資料的価値(於東大中世文学会) (三一、四、一四)

黒川能の音楽(於工業クラブ、東洋音楽学会) (三一、五、二六)

黒川能の行事と音楽(於如水会館能楽音のライブラリー) (三一、八、三)

翁と三番叟(東洋音楽学会) (三一、六、二三)

能の舞踊について(二)(於丸ノ内ホール・日本舞踊協会) (三一、八、一一)

狂言の舞踊について(於丸ノ内ホール・日本舞踊協会) (三一、八、一一)

能の音楽(東洋音楽学会例会、於工業クラブ) (三一、三より毎月一回十二回總) (三一、八、一一)

日本の郷土芸能について(於和洋女子大) (三一、六、二二)

三隅 治雄

(三一、六、二二)

岩崎 友吉

(三一、八、一六)

(三三、二、一八)

(三三、二、七)

江本 義理

保存科学(於東大)

絵画資料の科学的研究(日本美術家連盟資料委員会)

イタリヤにおける文化財殺虫、殺菌に関する文献紹介(東京国立博物館 古文化資料自然科学研究会)



放射化分析の古文化財への応用(東京国立博物館古文化資料自然科学研究会) (三二、四、二四)

登石健三

γ線透視による金銅仏内部構造上の諸特徴(於東京国立博物館古文化資料自然科学研究会) (三二、一〇、四)

日本魔鏡の一例について(於科学博物館古文化資料自然科学研究会) (三三、一、二二)

E 講演・放送(テレビ)

田中一松

古代美術の伝統(於長野県阿南季節大学) (三一、一、二三)

来迎美術展特別講演会(於奈良国立博物館) (三一、四、二八)

平安・鎌倉展文化講演会(於名古屋松坂屋) (三一、五、二)

日本古代の絵画(於東京国立博物館) (三一、六、二八)

雪舟等楊と拙宗等楊(於東京国立博物館) (三一、五、一五)

浄土教美術論(於比叡山延暦寺宿坊) (三一、七、二二)

日本美術に及ぼせる密教の影響(於東京国立博物館) (三一、一、一〇)

平安時代的美術(於朝日新聞大阪本社) (三二、一〇、二三)

仏教の世界像と古代人の信仰(於東京国立博物館) (三三、三、二八)

光琳の芸術(N・H・Kテレビ)

(三三、二、一)

雪舟画年代考(於大阪毎日、京博主催)

(三一、二、一〇)

雪舟の入門(於京都毎日、京博主催)

(三一、二、一二)

熊谷宣夫

法隆寺の話(成蹊大学、長野県教育委員会—上諏訪市)

川上涇

同 右(飯田市)

(三一、八、八)

中国の絵画について(本荘市中央公民館)

(三一、八、八)

中国画の話(成蹊大学、長野県教育委員会—岡谷市)

(三一、四、一九)

中国画の話(成蹊大学、長野県教育委員会—天竜峡)

(三一、八、一七)

中国画の話(成蹊大学、長野県教育委員会—天竜峡)

(三一、八、一八)

秋山光和

古美術品の光学的研究(N・H・Kテレビ)

(三一、二、二)

日本上代美術の形成と発展(フランス語日仏会館)

(三一、二、二)

Nara Capitale ancienne du Japon (N・H・Kラジオ フランス語)

(三一、七、)

国宝切手めぐり中尊寺金色堂(ラジオ東京)

(三一、八、)

ルーヴル美術館附属研究所の近業(古文化財自然科学研究会)

(三一、二、)

ルーヴル美術館附属研究所の近業(古文化財自然科学研究会)

(三一、二、)

La prochaine Exposition d'Art Japonais à Paris  
 Rincean de vignes dans l'art Japonais ancien (中央大学)

久野 健

光学的方法による彫刻の研究 (ブリジストン美術館)  
 日本の彫刻について (国立近代美術館)  
 アイソトープの平和利用 (日本短波放送)  
 鑑真和上と唐招提寺 (東京国立博物館)  
 平等院鳳凰堂 (日本テレビ)

隈元謙次郎

レオナルド・ダ・ヴィンチ (ラジオ東京テレビ)

田実栄子

日本の染織 (ラジオ東京テレビ)

浦山政雄

邦楽の変遷と現状 (日本大学)  
 歌舞伎の鑑賞 (日本女子大学)

横道萬里雄

能の言葉 (日本短波放送) (三一、四一五)  
 能の舞の基礎 (東京新聞社) (三一、七、五)  
 狂言のはなし (水道橋能楽堂) (三一、九、九)  
 鳴子と安達原 (川崎市公会堂) (三一、九、九)  
 能の女装束 (観世会館) (三一、一〇、)  
 大江山 (N・H・K) (三一、一〇、五)  
 釣狐 (N・H・K) (三一、一〇、一二)  
 能楽概説 (Y・W・C・A) (三一、一一、)  
 能の音楽 (文部省視聴覚資料) (三一、一一、)  
 狂言の音楽 (文部省視聴覚資料) (三一、一一、)  
 清経 (N・H・K) (三一、一二、二四)  
 清経 (純) (N・H・K) (三一、一二、二四)  
 日本の芸能 (N・H・K) (三一、一二、二四)  
 能の音楽 (水道橋能楽堂) (三一、一二、二四)  
 能の囃子 (東京女子大) (三一、一二、二四)  
 能の構成と謡の位取 (第一銀行) (三一、一二、二四)  
 能の囃子について (観世会館) (三一、一〇、一三三)  
 半部について (染井能楽堂) (三一、一一、三〇)  
 能の面と扮装 (Y・W・C・A) (三一、一一、二〇)

日本の郷土芸能について (和洋女子大)  
 湯立と神楽 (房総文化研究会)

三隅治雄

(三一、六、二二)  
 (三一、二、二〇)

民俗芸能(埼玉文化財指導者講習会)  
秋まつり(ラジオ東京テレビ)  
(三三、一〇、一六)

日本の郷土芸能(長野県教育委員会)  
(三三、一〇、一五)

島々の民俗芸能(房総文化研究会)  
(三三、一一、二〇)

薩南諸島の芸能(東洋音楽学会)  
(三三、一二、七)

岩崎友吉

文化財における保存科学の諸問題(白水)  
(三一、六、一〇)

阿弥陀堂落成記念)  
(三一、八、一六)

保存科学(東大)  
(三一、八、一六)

#### 四、施設

##### A 光学的研究設備

昭和二十七年年度には、それまでの研究結果にもとづき、海外における研究機関の設備を参考として、機関研究費の交付をうけ、本格的な設備を整えるに至つた。その後漸進的ではあるが、その充実を図り現在左の通りの設備をもっている。

##### 1 固定式装置

白色X線透過装置—一〇〇キ  
ロポルト一台

単色X線透過装置—一台  
(附)螢光板、支持台、防X線用籬立

紫外線照射装置—二台

ナトリウムランプ照射装置—二台

双眼実体顕微鏡及びその写真撮影装置—一式

文化財の科学的保護について(柏市気象台)  
(三三、三、二七)

登石健三

分光分析(科学博物館)  
(三一、一一、一)

美術品の照明と湿度調節(国立近代美術館)  
(三三、一二、一九)

##### F 展観

1 宋元水墨花鳥画展 三、三、一 於当所 入場者三〇〇名

2 白描やまと絵展 三、三、二 於当所 入場者四〇〇名

##### 2 可搬式装置

可搬式白色X線透過装置及び  
附属品—一組 可搬式単色X線透過装置—  
一台

可搬式紫外線照射装置—二台

3 リンホフスパーテヒニカー一式

##### B 保存研究設備

分光光度計、大型アスマン乾湿計、金属顕微鏡、分光器、蒸留水製造装置—一式、M32ガイガーミニユラー計数装置一式、紙耐採試験器、自記湿度湿度計、携帯用乾式検査瓦斯メーター、改良型労働塵埃計、恒温恒湿槽、金属試料研磨機、粉塵捕集器、光電管比色計、差動式色温度計、携帯用紫外線物質鑑識器、直読型硝子電

C 蔵書と資料

1 蔵書

所蔵図書は、東洋古美術、近代日本美術、西洋美術関係を主として、和漢洋書を合せて約二、五〇〇部である。他に美術関係雑誌、売立目録類および拓本等がある。

三十二年度 三七七冊(和漢書) 九冊(洋書)

三十三年度 三八五冊(和漢書) 一〇冊(洋書)

新蔵書は、右のとおりであるが、なお、諸外国の美術館、研究所等の出版物も、本研究所発刊の「美術研究」と交換贈物を行っている。現在主な交換先は次の通りである。

- U. S. A Art Institute of Chicago, Ryerson Library
- The Cleveland Museum of Art
- Harvard Yenching Institute
- The New York Public Library
- Los Angeles County Museum
- University of Michigan
- The University Museum, Philadelphia
- M. H. de Young Memorial Museum
- Columbia University in the City of

- New York
- The Detroit Institute of Art
- The Toledo Museum of Art
- William Rockhill Nelson Gallery of Art
- The Library of Congress
- England University of London, School of Oriental and African Studies
- Museum of Eastern Art, Oxford
- British Museum
- France Société Asiatique
- ICOM
- Musée Guimet
- Bibliothèque Nationale
- M. Demieville
- l' Ecole Française d' Extrême Orient
- Italy Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente
- Istituto Centrale del Restauro
- Triennale di Milano
- Holland Museum von Aziatische Kunst
- Kern Institute
- Prof. Dr. Jahn
- Germany Verlag George D. W. Callway

Köln Museum feur Ostaratische kunst

中国 国立北京図書館

中国人民对外文化協会

ソ 聯 文物出版社

ソ 聯 人文科学学院

レーニン記念図書館

Sweden Biblioteket Ostaratisca Samlingarna

Swiss Arthus Asiae

Viet Nam Société des Etudes Indochinoises

Hungary The Francis Hopp Museum of Eastern Asiatic Arts

Belgium Musée Royaux d'Art et d'Histoire

Austria Österreichisches Museum für Angewandte Kunst

## 2 資料

本研究所の資料は、主として写真による美術研究資料であるが、その収集の目的は、内外の資料をあまねく収集、整理、保管して、その完璧な収集箇所とし、美術の研究に資することである。この趣旨に基いて設立当初より写真撮影による資料の作成をはじめ、印刷物を整理してこれに加える等、その収集につとめている。

資料の内容は、大別して日本美術、東洋美術、西洋美術および明治、大正美術に分け、更にこれを絵画、彫刻、工芸、建築等に分類整理している。その数は、特別大型のものから小型のものまで約九五、〇〇〇点である。写真資料の他には、印譜、図版カード等がある。

## D 黒田記念室

黒田記念室は、当研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられたもので、その油絵、素描、画架などを陳列している。

収蔵されているものは、油絵一二五点、スケッチブック九九点、デッサン一七〇点である。これは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが、その後、樺山愛輔、黒田照子、田中良等からの寄贈もふくまれており、随時陳列替を行っている。毎週木曜日午後一時から四時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは、「知感情」、「花野」、「湖畔」、「赤髪の少女」、「あるる日影」、「温室花壇」等である。

## E 閲覧室

当所の図書および研究資料は「研究資料閲覧規程」を設けて公開している。閲覧者は、主として研究者、学者、美術関係専攻の学生等で、年間の閲覧者数は、延一、二〇〇名程度である。

## F 土地と建物

1 土地

2 建 物  
四四二坪

本館(地階および二階建鉄筋コンクリート造り一棟)および

東京国立博物館構内に木造平屋建一棟倉庫一棟(保存科学部)の外に、東京芸術大学音楽学部邦楽科教室の一部(芸能部)を使用している。

五、刊 行 図 書

A 昭和三十一年・三十二年の刊行図書

昭和三十一年度	(1) 美術研究 一八六号—一九一号	(2) 日本美術年鑑昭和三十一年版
昭和三十二年度	(1) 美術研究 一九二号—一九七号	(2) 日本美術年鑑昭和三十三年版

建 物 内 訳		
使用区分	坪 数	備 考
閲覧室、資料室	40	
	30	
	20	資料室、研究室
書 庫	60.5	三階建、一階 21.49坪
記 念 室	40	黒田清輝作品陳列
陳 列 室	40	会議室共用
管 理 室	19.1	所長、部長、室長各室
研 究 室	36.9	美術部使用
事 務 室	6.9	37人
写 場	19.2	
写 場 暗 室 等	19.1	
写 真 原 板 室	6.9	
二 階 倉 庫	6.9	黒田清輝作品収蔵
車 庫	8.5	
倉庫、渡廊下等	184.9	
芸能部研究室	8	二 室
保存科学部研究室	40	三室および暗室
同 上 倉 庫	2.66	薬 品 倉 庫
2 延	559.56	

488.9

37人

B 既刊図書

支那古版画図録 (美術研究資料第一輯)	昭、七
吉備大臣入唐絵詞 (同)	昭、九
徽宗摹張萱搗練図絵 (同)	昭、一〇
鳳凰堂雲中供養仏 (同)	昭、一一
桃山時代金碧障壁画 (同)	昭、一二
富貴寺壁画 (同)	昭、一三
印度及南部アジア美術資料 (同)	昭、一四
光悦色紙帖 (同)	昭、一四
菱田春草 (同)	昭、一五
能恵法師絵詞 (同)	昭、一六
宮素然明妃出塞図巻 (同)	昭、一六
日本美術資料	昭、一三
同	昭、一四
同	昭、一五
同	昭、一六
同	昭、一七
近代日本美術資料	昭、二三
同	昭、二四
同	昭、二六
墨跡資料集	昭、二四
同	昭、二四
同	昭、二六

四四

源氏物語絵巻	昭、二四
黒田清輝素描集	昭、二四
栄山寺八角堂	昭、二五
栄山寺八角堂の研究	昭、二六
美術研究	第一号—第一八五号
日本美術年鑑	昭和十一年版—同三十年版
東洋美術文献目録	昭和六年—同十年
同 続編	昭和十一年—同二十年
東洋古美術文献目録	昭和二十一年—同二十五年
美術研究索引	第一号—第一百号
法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究	昭、二八
黒田清輝作品集	昭、二九
なお、当所の刊行によらず主として当所員の協同調査による研究成果として出版されたものに次の如きものがある。	
光学的方法による古美術品の研究	吉川弘文館 昭、三〇
梁楷	便利堂 昭、三一

28  
5  
23

29  
5





七、本研究関係法規並びに規程

(一) 文化財保護法 (抜萃)

第一章 総則

第一条 この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。

(文化財の定義)

第二条 この法律で「文化財」とは、左に掲げるものをいう。

- 一 建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書その他の有形の文化的所産でわが国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの及び考古資料(以下「有形文化財」という。)
- 二 演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産でわが国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの(以下「無形文化財」という。)
- 三 衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習及び

臨時筆生	見城敏子 ✓
同	石川陸郎 ✓
生物研究室長(兼)	文部技官 岩崎友吉 ✓
同(兼)	江本義理 ✓
庶務室長	文部事務官 小島忠二 ✓
庶務係長	文部事務官 加藤輝之 ✓

會計係長	同 羽田吉一 ✓
同	文部事務官 藤江金治 ✓
事務員	長沢朝夫 ✓
臨時筆生	川島道子 ✓
雑務手	鎌田幸四郎 ✓
同	鶴田豊四郎 ✓

これに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件でわが国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの(以下「民俗資料」という。)

四 貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡でわが国にとつて歴史上又は學術上価値の高いもの、庭園、橋りより、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地でわが国にとつて芸術上又は觀賞上価値の高いもの並びに動物(生息地、繁殖地及び渡来地を含む)、植物(自生地を含む)及び地質鉱物(特異な自然の現象の生じている土地を含む。)でわが国にとつて學術上価値の高いもの(以下「記念物」という。)

- 2 省略
- 3 省略

(政府及び地方公共団体の任務)

第三条 政府及び地方公共団体は、文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且

つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであることを認識し、その保存が適切に行われるように、周到の注意をもつてこの法律の趣旨の徹底に努めなければならない。

(国民、所有者等の心構)

第四条 一般国民は、政府及び地方公共団体がこの法律の目的を達成するために行う措置に誠実に協力しなければならない。

2 文化財の所有者その他の関係者は、文化財が貴重な国民的財産であることを自覚し、これを公共のために大切に保存するとともに、できるだけこれを公開する等その文化的活用を努めなければならない。

3 政府及び地方公共団体は、この法律の執行に当つて関係者の所有権その他の財産権を尊重しなければならない。

第二章

第三節

(附属機関)

第二十条 委員会の附属機関として、文化財専門審議会、国立博物館及び国立文化財研究所を置く。

(国立文化財研究所)

第二十三条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行ふ。

2 国立文化財研究所の名称及び位置は、左の通りとする。

名	称	位	置
東京国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所	東京	京都
		奈良	市

3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、委員会規則で定める。

第四節 職員

(職員)

第二十五条 委員会に置かれる職員の任免、昇任、懲戒その他人事管理に関する事務については、国家公務員法(昭和二十二年法律第二十号)及びその特例に関して規定する法律の定めるところによる。

(定員)

第二十六条 委員会に置かれる職員の定員は、別に法律で定める。

(従前の国立博物館)

附則第二百二十四条 法律(これに基く命令を含む)に特別の定めのある場合を除く外、従前の国立博物館及びその職員(美術研究所及びこれに所属する職員を除く)は、この法律に基く国立博物館及びその職員となり、従前の国立博物館附置の美術研究所及びこれに附属する職員は、この法律に基く研究所及びその職員となり、同一性をもつ

て存続するものとする。

2 この法律に基く東京国立文化財研究所は、従前の国立博物館附置の美術研究所の所掌した調査研究と同一のものについては、「美術研究所」の名称を用いることができる。

(二) 教育公務員特例法施行令(抜萃)

第三条の二 文部省設置法(昭和二十四年法律第百四十六号)第十三条に掲げる機関(日本芸術院を除く)並びに文化財保護法(昭和二十五年法律第二百四十四号)第二十条に掲げる国立博物館及び研究所の長及びその職員のうちもつばら研究又は教育に従事する者については、法第四条、第七条、第十一条、第十二条、第十九条、第二十条及び第二十一条中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは「任命権者と読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

(三) 東京国立文化財研究所組織規程

(昭和二十七年三月二十五日文化財保護委員会規則第四号、昭和二十九年六月二十九日文化財保護委員会規則第一号第一次改正)

(東京国立文化財研究所の組織)

第一条 東京国立文化財研究所の所掌事務を分掌させるため、

左の三部及び一室を置く。

美術部  
芸能部  
保存科学部  
庶務室

(美術部の三室及び所掌事務)

第二条 美術部に、美術部の所掌事務を分掌させるため、第一研究室、第二研究室及び資料部の三室を置く。

2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術の調査研究並びにその結果の公表に関する事務のほか、黒田記念室に関する事務をつかさどる。

4 資料室においては、美術研究資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに美術研究資料に関する写真の作成及びその原板の保管並びにエックス線写真、赤外線写真、紫外線写真その他の特殊写真による美術の研究に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び所掌事務)

第三条 芸能部に、芸能部の所掌事務を分掌させるため、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室の三室を置く。

2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研

究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

4 郷土芸能研究室においては、郷土芸能及びその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

(保存科学部の三室及び所掌事務)

第四条 保存科学部に、保存科学部の所掌事務を分掌させるため、化学研究室、物理研究室及び生物研究室の三室を置く。

2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

(庶務室の所掌事務)

第五条 庶務室においては、左の事務をつかさどる。

一、別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職員の仕事に関すること。

二、公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

三、経費及び収入の予算、決算その他会計に関すること。

四、行政財産及び物品の管理に関すること。

五、職員の福利厚生に関すること。

附則

1 この規則は、昭和二十七年四月一日から施行する。

2 美術研究所組織規程(昭和二十六年文化財保護委員会規則第五号)は、廃止する。

附則

この規則は、昭和二十九年七月一日から施行する。

#### (四) 所内規程

##### 1 研究資料閲覧規程

第一条 本研究所の図書及び研究資料(以下単に「資料」という)の閲覧は、この規程の定めるところによる。

第二条 資料の閲覧は無料とする。

第三条 資料の本研究所外の持出しは禁止する。

2 一部の重要な資料は公開しないことがある。

第四条 閲覧者は、本研究所において適当と認められた者の紹介がなければならない。

第五条 閲覧者は、所定の申込票に必要事項を記入し提出しなければならない。

第六条 閲覧者は、研究上資料の閲覧が長期にわたるときは、

一定期間有効の閲覧票を交付する。

2 期間を経過した閲覧票は返還しなければならぬ。

第七条 閲覧者は、所定の借出票に必要事項を記入し、閲覧票を添えて提出しなければならない。

2 閲覧終了後資料は掛員が検収し、引換えに閲覧票を返還する。

第八条 閲覧人員は、一時に概ね十名以内とし、一人一回に貸出しする資料は左の通りとする。

図書 三部十冊以内

写真 三種以内

2 閲覧中の資料であつても本研究所において必要があるときは返還させることがある。

第九条 閲覧は本研究所閲覧室以外で行つてはならない。

2 閲覧室においては、インク、墨汁等の使用並に飲食喫煙を禁止する。

第十条 閲覧者は、資料を鄭重に取扱わなければならない。

2 閲覧者が資料を滅失、毀損及び汚損したときは本研究所で定める損害の賠償をなさなければならない。

第十一条 閲覧者がこの規程に反すると認めるときは、閲覧許可を取消すことがある。

第十二条 閲覧時間は、午前十時より午後三時三十分までとし、閲覧停止日時は左の通りとする。

毎週、水、土、日曜日

## 祝日

開所記念日(十月十八日)

年末年始(十二月二十五日より翌年一月七日まで)

夏期(八月一日より八月三十一日まで)

第十三条 本研究所において必要があるときは、前条の閲覧時間及び日時を随時変更することがある。但しこの場合には予め揭示する。

## 2 黒田子爵記念室観覧規程

第一条 本研究所の黒田子爵記念室(以下単に「記念室」という)は、この規程によつて一般に公開する。

第二条 観覧は無料とする。

第三条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第四条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第五条 観覧者は、記念室内において左の事項を行つてはならない。

一 陳列品に手を触れること。

二 インク、墨汁等を使用すること。

三 飲食及び喫煙をなすこと。

第六条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第七条 観覧の日は毎週木曜日午後一時から同四時までと

し、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝日

開所記念日(十月十八日)

年末年始(十二月二十五日から翌年一月六日まで)

夏期(七月二十一日から八月三十一日まで)

第八条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。但しこの場合は予め揭示する。

---

昭和三十三年八月十五日印刷

(非売品)

昭和三十三年八月二十日発行

編集発行者 東京国立文化財研究所庶務室

印刷所 大蔵省印刷局

発行所 東京国立文化財研究所

東京都台東区上野公園(電)四四八七  
一九二三